

下げ得ることを理論的且実験的に究明し、加熱温度を従来の 900°C 以上から 800°C 迄下げたものである。即ちこの低温焼入法は加熱温度を 800°C の理論上必要最少限度 (Ac₃ 線以上 30°C~50°C) に止め、700°C 迄温度低下する間に成型作業を完了し 700°C 以上の点で水焼入するものであつて、焼が完全に入ること、焼割がないこと、及び歪が少ないことの大きい特長を有している。而もこの方法は容易に現場作業に採用が可能である。勿論酸化脱炭及び肌荒は従来の焼入方法に比べて少く、酸化は約 1/3 脱炭及び肌荒は 1/10 以下の驚異的な減少を示し、弾性限度、疲れ限度の高い優秀なばねを作ることができるものである。

この低温焼入法によつて従来の油又は水焼入の欠陥であつた焼の不完全、割れ、歪の課題が解決でき、しかも酸化、脱炭、肌荒の弊害については充分認識されながらも加熱に伴う宿命的なものとしてあきらめられていたがこれらも一挙に解決できたものである。

当工場では 8 月から全面的にこの低温焼入法を採用しているが、あらゆる点ですぐれた成績を示し、この採用によりマイナスになつた点は殆んど見出せない。

以上の外、この低温焼入法採用による付帯的利点としてばね板寿命の延長、加熱燃料費及び焼入油の節減等をあげることができるが、これらによる経済的利益も無視できない。

(4) ブリキの荷ずれ疵に就て

○大山太郎*・後開敬也*

ブリキ板を多数積重ねて輸送する際に鉄力表面上に小さい黒点状の欠陥を生ずることがある。これの発生の現象及び機構について調査研究したことを報告する。

黒点の発生箇所はブリキ面上に突起している所やグリースラインのチンリツツ上に多く発生した特に集中圧力がかかり、荷ずれ加工を受けた所に多く発生する様である。これを顕微鏡及び電子顕微鏡により検査すると黒点発生部分は、もともと隆起した所に発生したものであるが表面の錫が破壊されて鉄と錫の合金層を露出し更に著しいものでは合金層を破壊して地鉄面となつてしまつている。従つて普通の鉄力面に比較して耐蝕性が劣り腐蝕液に浸したときに鉄の溶出量が多くなつて来る。

黒点が発生する現象を調査する為ブリキを入れた箱を振動試験機にのせて強制的に荷ずれを起せしめ輸送に見られる黒点を再現せしめることが出来た。発生した黒点部分の粉末を、電子廻折及び電子顕微鏡により調査すると、これは非常に微細な粉末より成立つていものであるが、SnO 或は SnO₂ が認められ又 Sn の粉末も認められる。又木炭ガス中と空中にて錫を酸化させたときの重量変化も熱天秤にて測定した傾向から不完全な酸化の雰囲気では SnO が発生してくることが考えられる。

(5) β 線厚み計及び鍍錫量測定装置について

竹本 国一*

藤井 昭明*

最近放射性同位元素が産業に利用されているが吾々は

放射線源として Sr 90 でブリキ原板 0.2~0.6 mm の走間帯鋼厚み計の研究及び C¹⁴ でブリキ板上の錫量を無破壊で短時間に測定出来る装置の研究を行い好結果を得たので報告する。

1. 厚み計 (透過型)

β 線の物質による吸収は $I = I_0 e^{-\mu \rho d}$ によつて表わされる。但し ρ は密度、 d は吸収層の厚さである。故に ρ が分つていれば d を決定することが出来る。この場合 I の測定に精度よく安定の優れた電離箱方式を利用した。装置は Sr 90 (エネルギー 2.5 Mev, 半減期 25 年) 10mC 電離箱、電子管式増巾器指示メーター及自動記録器等を用いた。その結果ブリキ原板 (0.2~0.6 mm の帯鋼の走間に於ける厚み) を $\pm 0.5\%$ の精度で測定出来た。

2. 鍍錫量測定器 (後方散乱)

β 線をブリキ板の表面一定面積 (径 4.5 cm) に投射すれば表面錫と地鉄によつて後方散乱される。表面錫を透過し地鉄の全断面を透過しない様なエネルギーの β 線を用いれば地鉄の厚さの影響なしに錫の厚みを測定出来る。β 線源としては C¹⁴ (エネルギー 0.15 Mev, 半減期約 5,000 年) 5mC を使用し鍍錫量 0.2~3.0 lbs/B.B で $\pm 2\%$ の精度で測定出来た。

(6) 鑄鉄中ガス分析法について

山本 正登**

鑄鉄中のガス成分がその黒鉛化、鑄業等に最も関係を有すること又化学的組成がほぼ等しくても溶解法や素材の過去の履歴によつて種々その組織や性質が変化することは周知の事実である。

従来鑄鉄中のガス分析に関する研究は鋼に比べて比較的数少なく、時に見受けられる文献についても、その結果が極めてまちまちであることに気づく。これはガスの存在する状態が鋼に比べて複雑であるとともに、その偏析が極めて多いことにも原因するものと思われるが、定量法並びに試料採取法等が確立せず学振においても鉄と鋼とを同一扱いをしておる現状である。

特に H₂ 分析法については、従来の 800°C 真空加熱による学振法に対して 900°C 加熱説があり又最近の傾向としては真空溶融法によらねば、完全抽出は不可能であるとして加熱法を否定した説もある。しかしこの溶融説は真空溶融装置による一連的な加熱・溶融両法による結果を比較しそれより加熱法の低値を指摘したものである。

これは溶融装置自体が O₂ を目的とし H₂ の定量は二義的なものとして発達したものであるために黒鉛及び金属蒸気に対するガス吸収の問題を完全に除かぬ限りは加熱法を否定することはどうかと考えられる。

筆者は従来より O₂ 分析は溶融法 (炭素螺旋式抵抗炉) により H₂ は先に基礎実験を行つて学振法に再検討を加えて確立した 900°C 加熱法にて実施してきたが、かかる問題について両法の比較試験を行うとともに、学振法を訂正し分析法を統一すべきことを要望するものであ

* 東洋鋼板株式会社下松工場

** 三菱造船広島造船所